

# プラトンの知識について

小林 茂 幸

形而上学へのプラトンの中心的な動機の一つに、知識に関する一群の問題が挙げられますが、プラトンが直面した困難を理解するために、プラトンが何を知識の対象に設定したのかという問題をまずはっきりさせておきたいと思えます。言い換えれば、人が知識している当のものは何であるのかという問題です。『国家』編に於いて次のような問いをソクラテスは投げ掛けています。

「ものごとを知っている人は、何かを知っているのかね、それとも、何でもないものを知っているのかね？」

問題は、何かという言葉の意味のなかにあるように思われます。ここで、何かというのは、有るもの、存在しているところの何かのことであり、何でもないものとは、有らぬもの、存在しないもの、非有を指示していると考えられます。我々が知り得るものとは、有るもの、存在しているものだけであつて、有らぬもの、存在していないものは知ることができないということになります。この答えを得たソクラテスは一つの論点を確立していきます。

「完全にあるものは完全に知られうるものであり、まったくあらぬものはまったく知られえないものである」

そして、有るもの、存在している何かを対象とした認識を知識と名付けて、有らぬもの、存在していないものは知ることができないので、精神の無知である状態を対応させています。しかし、有るも

のと有らぬものの中にあるようなもの、有りかつ有らぬような性格を持つようなものが何かあるとすれば、そのものは純粹に有るものとまったく有らぬものの中に位置づけられるので、これに対応させる精神の状態にも、知識している状態と無知である状態との何か中間にあるようなものを対応させなければならなくなりますが、この状態には思わく、また別の言葉で言えば思いなしが対応させられることとなります。すなわち、思わくがその対象とするところのものは一〇〇%確実に存在していると言えるものではありませんが、また、一〇〇%どこにも存在しないとも言えない、ちょうど両者の中間の位置を占め、たえず運動して、変化しているこの世界のなかにある多種多様な物、個々の個物です。

もしも、我々に知識するものは何であるのかという問題が提起されたら、現代人は命題の真であることと答えるだろうと思います。つまり、数字の5は素数であるとか、プタは飛ぶことができないという命題が真であるのかどうかを追求することですが、こういう具合に考える現代の我々にとって、事実とか命題とか呼ばれる知識する対象は大變抽象的になってきます。けれども、プラトンはこういう具合に問題を考えていかなかったと言ってもいいだろうと思います。知識の対象を命題の真偽という形でとらえたのではなく、そのかわりに、知識する対象を存在している何かというように形を持つものとして実体化していったと言うか、存在するものとして形のあるものに具象化することに心を傾けたようです。知識の対象は明確な形をもって存在するものでなければならずと仮定すると、真であるというものは存在しているということを前提条件としなければ成り立たなくなるといふ帰結が生まれてこなければならなくなります。

「あるということにもすでに到達できないのに、真というものに到達することができるだろうか」  
『デアイテトス』(186C)

また、プラトンは存在するということと真であるということをはっきりとした形で区別して語っていないところがあるので、このことが混乱のもとを余計に作り出してあるようです。知識しているものは存在しなければならない、知識の対象をこのように存在している何かと考えると、知識するとは二つのもののある種の相対関係として捕らえられてきます。つまり、知識する人、またはその人の魂と対象、知られているところのもの、存在し知識されているところのものの関係という具合に考えられてきます。プラトンは知識の対象として、命題ではなく物という形をとって超時間的世界に存在しているイデアを仮定して、これと知識しようとする人との関係に於いて知識の成立条件を考えました。イデアは精神が自分自身の眼で見ることができ、精神から独立して存在しているある種の物体であって、精神の中だけにあると考えられるような概念と呼ばれるものではありません。

プラトンが以上のように知識の対象を命題でなく、物と考えるようになった理由として、次のようなギリシヤ語の慣用的な語法が挙げられます。ギリシヤ語では知識しようとする相手を直接目的語のように見なして、それを知覚を意味する動詞のすぐ後ろに置く傾向があるようです。つまり *I know you, who you are. "I know Meno, who he is. "I know Meno, that he is rich.* といふ具合です。本来であれば *that* 節の中の主語であるべきものをいったん前に出して動詞の直接目的語にしてしまうことによつて知識の対象を命題から物へとすり替えてしまふ性質がギリシヤ語にはあるようです。こうして考えれば、知識するといふことを知識する人とある種のものとの関係として捕らえ、命題の真偽を問うことではないとプラトンが考えたことも、簡単に納得がいくと言えるかもしれせん。

他にもいくつか語法上の理由がありますので、簡単に触れておきたいと思いますが、ギリシヤ語には言葉と名前を意味するのに別々の単語を使わずに、ひとつの単語によつてこの二つのものを言い表

わしてしまふ性質があります。名前には必ずそれに対応すべきものが存在しているわけですが、言葉というものには必ずしもそういう対応があるわけではありません。つまり、対応物がないものを、対象化、実体化してしまふ場合があるということになります。

また、他の人よりも頭の中にはっきりとしたある種の精神的な像を思い浮かべることが出来る能力を持つている人がいるという事実を挙げることもできると思っています。こういう人はもの事を絵とか写真のような像の形にして考えることに卓越しています。このような才能に乏しいひとは、この才能に恵まれた人の思想を理解するうえに於て、困難を感じることもあるかもしれません。プラトンがこの能力に於て、卓越していたことは作品を飾っている比喻やミュートスを一読すれば判然としてくるだろうと思われまます。

プラトンが真実性、アイデアを見ると言う場合には、文字通りに見るわけですが、肉眼で見るとは無くして、魂の目で見るということになります。魂の目によって見るといふ場合、この見るといふ行為はふつう我々が行なっている感覚知覚の際に見る、または触れるといふことをモデルとして考えられていて、そのアナロジーとして考え出されたものであると言つていいだろうと思ひます。

ここで、知るといふ言葉の意味に、二つの異なつた解釈の仕方があることに注目しておきたいと思ひます。knowledge by acquaintance というものと knowledge by description と呼ばれるものがあります。知識ですが、はじめの knowledge by acquaintance のほうは、じかに、直接に対象となつてゐるものを知るといふ意味です。たとえば、私は次郎君を知つてゐるといふ場合、実は本人に会つてゐないけれども名前だけは聞いたことがあるから知つてゐるといふ場合と、直接本人と面とむかつて、握手をしたり、話をしたりして、会つて知つてゐるから知つてゐるといふ二つの解釈があるわけですが、次郎君に直接会つて知つてゐるといふ後者の場合を knowledge by acquaintance と呼ぶわけです。

これに対して *knowledge by description* の方はどうかと言うと、たとえば、私は中国はたいへん大きな国であることを知っているという場合、また、光は一秒間に地球を7回り半するくらいのスピードがあることを知っているという場合、私は中国に行ったことがなく、直接見たこともないけれども、地理学の本を読んで大きな国であることは知っている。本に書いてある記述を読んで得た知識だということ、*knowledge by description* と呼ばれているものです。このとき、私が知っているものは、物ではなく、*thing* や *object* でもない、抽象的な命題であるということになります。ところが *knowledge by acquaintance* の場合、対象として直接に知識すべき實在、存在している物がなければこの知識は成立しません。それは私達が机や椅子に触れると言うときのように、存在している形を持つものを手で触れるようなときには、實在物である机や椅子が存在していなければこの行為が成立しないのと同じ様な事態であると言えます。

プラトンが知識とは何か有るもの、實在しているものを対象にしなければ成立しないと言うときの何か有るもの、實在するものというものは、ふつう我々が机や椅子をつかまえて、これは有るのだとか實在しているのだとか言う時の有る、實在するとは幾分有り方が異なっています。机や椅子のように、感覚器官によって捕らえることができるものは、半分の實在性しか持たず、こういうものに対しては思いなしが成立するだけで、この机を知識することはできません。知識する対象は本当の意味で有ると言うことができる超時間的に存在するアイデアだけであって、アイデアだけが實在するということになります。そして、このアイデアを魂の目が直接に形を持つものとして目の当たりに見る見方、すなわち *knowledge by acquaintance* が、プラトンが知るといふときの認識の仕方であると言えます。

個物であふれているこの世界は、我々の感覚器官を通して姿を現わし、あらゆる点で不完全な世界

であると言えますが、永劫不変に続くイデア界は真の意味で実在する世界で、この現世は部分的、半ば実在する世界であると言うことができます。少し長くなりますが『パイドン』から引用します。

「視覚なり聴覚をなり、あるいは他の感覚なりを通じて、魂が、なにかあるものを考察するのに肉体を加えもちいる場合には、片時も同一性においてないもののほうへと、魂は、肉体にひきずられていくであろう。(中略)だがしかし、他を離れて、魂がみずからにおいて考察する時には、かしこ、純粹のもの永劫のもの、不死であり不変なるものへと赴き、さながらその存在との同族性を証するがごとく、まさに魂がひとりそれ自身にかえり、それが許されるときには、つねにかのものと共にありつづけるのである。そして、永劫不変の存在にふれるがゆえに、魂の彷徨はやみ、まさにかのものとかかわりつつ魂もまたつねに同一性においてある不変のものとなるのではないか。そしてまさに(知)とよばれるものは、魂のそのような状態にあることを名付けたもので、本来あったのではなかったのか。」(76c)

このような一節から明らかになると思いますが、そしてこのようなものはプラトンの書いたものに、しばしば見受けられることができるのですが、感覚器官を通じての知覚と、魂がみずから他の助けを借りずに行なう知覚との間には違いがあって、明確にそれらを区別していたということが明らかになると思います。そしてこの違いというのは、どこにあるのかと言うと、知識する対象と知識するために用いる器官との二点にあるわけです。

『テアイテトス』にヘラクレイトスが主張する万物は流転しているという説が出てきますが、何もそのそれ自体としてそれ自体にとどまっている自体的な有はない、すべてを生成のうち溶かし込んで何ものも固定させまいとする。すべてはただ運動しているだけであって、あると思われているこの

対象は単に生成だけで、「何かの」とか「私の」とか「あなたの」「これ」「あれ」とか言った言葉で、物を立ち止まらせることは許されない。善でも美でもすべて有るなどということはまったくなく、ただ成り行くのみで、したがって、何かについて何かを言うことは生成をやめさせて、そこに立ち止まらせることになってしまいます。ですが、そのときには言われた当のものは、すでに流動してしまっていて、それとは別のものになっている。ここにおいて、あらゆる知識の成立が否定されてしまうことになります。魂が感覚器官を通じて行う認識の対象とするところのものは、ヘラクレイトスに言われているこの運動している世界であって、そこには知識は成立しないことになります。したがって知識の成立をみるためには、なにかそれ自体で存在するもの、自体的な有を固定しなければならなくなります。そして、あらゆる自体的な有の極限にあるものとしてイデアというものが考えられ、知識は魂が自分自身で他の助けを借りずにイデアを見る時に成立するということになります。

もうすこし掘り下げて考えてみたいと思いますが、プラトンは知識をきわめて厳密に考えているのであって、魂がそれ自体独立の状態になって見ていさえすれば、それらがすべて即座に知識になるとは考えていなかったと言えます。

たとえば、『テアイテトス』には裁判を例に挙げながら知識と真なる思いなしの違いについて説明がなされています。

我々は自分の思う事がすべて正しいとは言えない事実を知っています。したがって、我々の思いなしがすべてそのまま知識であるということができないので、正しい真なる思いなしだけを知識とするわけです。しかし、思いなしの真なるものが即座に知識であると言えるのかどうか疑問を投げ掛けています。真実を思いなすということであれば、それはとにかく誤謬を犯すものではない。けれども、たとえば裁判をするような場合、審議している事件に関して、そのことを知っているのは目撃者だけ

であつて、裁判官は正しい説得が裁判官に対してなされた場合には、それらの事柄をただ聴取によつて、眞実なる思いなしを把握した上で判断をしていくわけですが、このときに裁判官は知識することなしに、説得に基づいて判断を行なつたことになります。法定で行なわれる正しい裁判は必ずしも知識によつてなされるものではなく、正しい説得と正しい思いなしだけで行なわれることになります。だれも居あわせないで被害を受けたというような事件の場合、裁判官はいろいろな状況証拠から、正しい思いなしを持つことはできるにしても、それは事実の直接の知識とは違うものであるということになります。

正しい思いなしと知識との違いについては、『メノン』にも言及されています。

たとえば、誰かがラリサへ行く道をちゃんと知つていて、歩いて他の人々を導いて行くとするならば、無論、その人は正しく導くことになる。しかし、次のような場合にはどうなるのか？ すなわち、ある人がその道を実際には通つたことがなく、ちゃんとした知識も持つてゐるわけではないが見当をつけてその思わくが正しかったような場合は？ そういう人もやはり正しく人を導くのではないのか。行為の正しさというところに観点を置くなら、正しい思わくは何ら知識に劣らないことになる。正しい思わくを持つ人はラリサへ行く道を実際に通つたことはないけれども、どの道を行けばよいかを正しく見当づける人にたとえられていて、実際の経験の有無によつて知識を持つ人と区別されている。けれども、そのような区別にもかかわらず、思わくによつて人を導く人は知識を持つ人と比べても、導き手としてはすこしも劣るところがない。有益性という点においてはすこしも劣らないと説かれています。

『メノン』においては、正しい思いなしは知識となら劣るところがないという発言が繰り返し言われていますが、たとえば、『国家』において「知なしに正しい思わくを持つ人びとは、盲人がどう



にか道を間違えずに歩くのとなんら異ならない」と、強い調子で否定的に語られているのと比べてみると、強調の置かれ方の点で著しい対象をなしていると言えらるべきでしょう。そして、正しい思ひなしと知識を原理的に区別する基準として、なぜそれが真であると言えらるのか、原因の説明ができること、根拠を理解していること、さらにこの根拠を理解することによって知識を自分のもとへ縛りつけておくという知識の永続性の有無があるかどうか、『メノン』において語られています。区別のための原理的基準である根拠の思考のこのような内容の実際を見るならば、『メノン』における知識と正しい思ひなしとの区別は、区別それ自体は強調されているけれども、実態においては一種あいまいな区別にとどまっていると言えらるべきかもしれません。

これに対して『ティマイオス』では思ひなしと知識がもつと明確に区別されています。ここでは我々の日常的な経験や感覚を用いることによって捉えらるるものと、純粹思惟によつてのみ捉えらるるアイデアの真実在との区別に対応させられた形で説明されています。感覚されるものがすべてであるのか、それとも純粹思惟の対象としてのアイデアが別にそれ自体としてはたして存在しているのか、という宇宙論の問題が、正しい思ひなしと知識との区別の有無の問題に還元されて語られています。思ひなしがその対象とするところのものは、『国家』に語られている通りありかつ同時にあらぬもの（であると同時にでないもの）ということになり、純粹にあるものには知識を対応させて、完全にあらぬものには無知を対応させています。あるとあらぬの両方を分け持つもの、純粹にどちらであるとは正しくは呼べないものとは何であるのか。多くの美しいものの中に、醜く現れることがないと言われるものがあるとは考えられない。また、数々の正しいものの中に、決して不正に見えらるることのないものが一つとしてあるのか。無数の敬虔なものの中に、決して不敬虔に見えらるることのないものが一つもあるだろうか。これらのものは必ず何らかの仕方であしくあるようにも見え、また、醜くあるようにも

見える。このようなものはどちらにもとれるような相対的な性格を持つものであって、あるともあらぬともでないとも固定してしまえるものではありません。あるとあらぬの中間よりほかに位置づけすることができないもので、思わくされるものであって知識されるものとは言えない。要するに、思わくとは感覚界を対象とした認識能力であると言うことができます。

『テイマイオス』では次のように言われています。正しい思わくと理性（真に知る思考）とが少しも違わない能力であるならば、我々が身体を通して感覚する限りのすべてのものが、このうえもなく確かなものであるとされなければならぬ。これに対して、もし理性（真に知る思考）と正しい思わく（憶測でたまたま真実を射当てたという場合の思わく）とが、種類を異にするふたつのものであれば、我々によつては感覚され得ず、ただ理性によつてのみ把握される形相は完全にそれ自体として独立に存在する。思わくと知識が別の二つのものであるという確信のもとに、この感覚界のほかにイデアの世界が存在するという宇宙論が力強く肯定されているわけです。

『国家』においては、思わくと知識とをそれらの対象を区別することによつて区別するに至っていませんが、それよりも早い時期に書かれたとされている『メノン』においては、同じものが、つまりこの例で言うところの道ということになりませんが、これが知識と思わくの同時にこの両者の対象になり得るように書いてあります。つまり、感覚界のものが、同時に知識と思わくの対象にされているわけです。そして、思わくと知識の区別は知識の永続性、理由または根拠の思考によつて長く知識を自分のもとに保持することができるといふ知識の永続性によつて区別されています。なおかつ、ここでは思わくを愚かなものだとして否定的には捉えられていません。ここで、プラトンが強調していることは、なぜその言論が真であるのか、根拠が理解できていないのならそれを知識していると言ふことはできず、ただ思わくしているだけに留まっているということ、思わくにある種の知的な

側面があることを否定してはいないわけです。ただ、このアプローチは心理主義的な面があるので強い説得力を欠いているようです。

『国家』においては、知識と思いなしを両者が向かう対象に基づいて区別するようになっています。永続的に真に存在する実体として魂の目によってでなければ見ることができないイデアを仮定し、一番充実した意味において知識の対象としての資格を与えました。このことは確かにあると言えるもの、確実に存在していると言えるものだけが真だとプラトンが考えていたことによると言ってもいいでしょう。

そして、思いなしがその対象とするところのものは、あるともあらぬともであるともでないとも断定できない感覚界であり、それゆえ真であることもあり、また偽である場合もある。

たとえ、感覚界がヘラクレイトスに言われているとおり、多種多様の捕らえることの出来ない流れであるとしても、感覚ではなく魂の推論する力を用いることによってこの絶え間無い流れを捉えることができるように思われます。これに関してプラトンは『テアイテトス』のなかで、つぎのように語っています。

「身体を通して受けとられるだけのものの中には知識は存しないわけなのだ。むしろそれらについての思量（勘考）の中に知識があるのだ」

我々がイデアの観得に向かう第一歩は、感覚界を、つまりヘラクレイトスの言う絶え間無い流れを推論することから始まるように思われます。

（宮城県気仙沼市 県が浦高等学校）